

その一步を、ずっと支えたい

今号の内容

- ▶地域こどもつなぐ応援金 人とのつながりが、未来を考える力に
- ▶未来まなび応援金 応援が、子どもたちの自信とやる気に
- ▶PEER座談会 困難が「強み」に変わるまで



わたしたちの「こども応援金」は、家庭の事情などで困難な状況にある子どもたちの、今と、これからを支える取り組みです。

活動の柱は二つあります。一つは、進学や高校生活を支える奨学金という経済的な支援。もう一つは、同じような経験をした先輩たちが寄り添う「ぴあ活動」を通じた、心の支えです。わたしたちは、お金を渡して終わりにするのではなく、子どもたちが自分の力で歩いていけるようになるまで、寄り添い続けることを大切にしています。

そして2025年度、新たな取り組みとして「地域こどもつなぐ応援金」を始めました。児童養護施設などで暮らす子どもたちへの支援は、社会の中で広がってきています。しかし、家族と一緒に暮らしながらも、経済的な困難や家庭の事情を抱え、周りからのサポートが十分に届いていない子どもたちがいます。そうした、地域の中で見えにくい存在になりがちな子どもたちにも、しっかりと目を向け、支えていきたいと考えています。

子ども一人ひとりが「自分の人生は自分で選べる」と実感できる社会を目指して。皆さまの温かいご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。



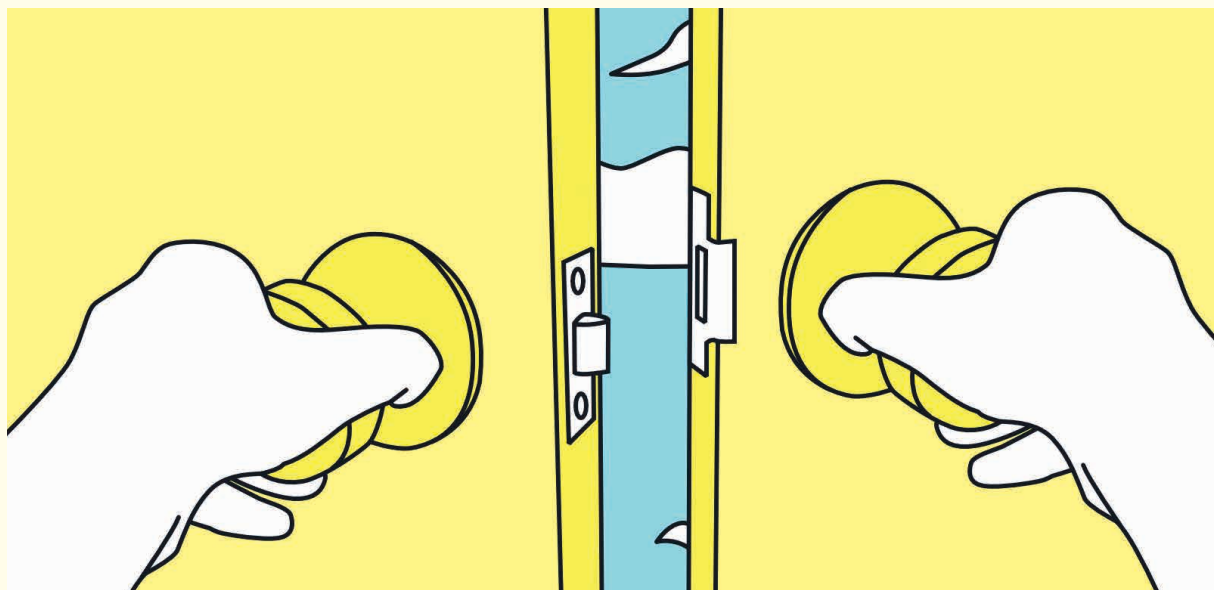
社会福祉法人

朝日新聞厚生文化事業団

<https://www.asahi-welfare.or.jp/>



人とのつながりが、未来を考える力に



「コン」とドアを叩いたら、そこは明るかった

暗い部屋にいた。でも、自分の手でドアを「コン」と叩いてみたら、外は思いがけず明るかった――。家庭と児童養護施設を行き来して育ち、施設の職員をめざす大学3年生のゆかりさん（仮名）、病を抱えた母親を中学生の時から支え続けた「精神疾患の親をもつ子どもの会 こどもびあ」代表の坂本拓さん。困難のただ中を生きている子どもの気持ちや、大人にできること、事業団が新たにスタートさせた「地域こどもつなぐ応援金」の持つ可能性を語り合いました。

「底に落ちて、 トランポリンで跳ね上がった」

ゆかりさんは母子家庭で育ちました。小学生の頃には一時期、児童養護施設で暮らした経験もあります。中学生になると母親が家を空けがちになり、幼い弟妹の世話をせざるを得ず学校には通えない日々が続きました。弟の保育園のお迎えの道すがら、同級生が制服姿で下校していく姿を見つめていた、と振り返ります。弟妹の食事や勉強の心配に追われても「頼れる大人が一人もいませんでした」。

転機は中学3年生のとき。家庭科の先生が週に2回、勉強を教えに来てくれるようになりました。その先生に「施設に戻りたい」と打ち明けたことで、児童相談所へと再びつながりました。「自分でドアをコンと叩いたら、そこは明るい場所だった。あれは自分で動いた結果だと、自分をほめたいです」。施設で再び暮らすようになって「底に落ちて、トランポリンで跳ね上がるような感覚でした」。安心して帰れる場所を得て、塾に通い、アルバイトもして、やりた

いことのある人生が始まりました。

いまは社会福祉を学ぶ大学3年生。憧れた施設職員をめざして実習に励みつつ、ぴあ応援団の活動のほか、趣味にも打ち込んでいます。「大学でみんなに会えるのが楽しみで、ちゃんと朝起きられるんです」と笑います。施設や里親家庭で育った仲間が集うぴあ応援団の存在も大きいといいます。「同じ経験をした仲間と話すうちに、自分自身や過去へのわだかまりが少しずつ消えていきました。前は言えなかったことも、いまは消化できています」

助けを求めるという発想すら、 浮かばなかった

坂本さんが中学生のとき、心のよりどころだった母親がうつ病を発症しました。理由のわからない苦しみを前に、「自分のせいかもしれない」と胸を痛めた坂本さん。できることは、母親の話を聞くことだけでした。「目的は、お母さんが泣く回数を少しでも減らすこと。自分の悩みは、誰にも相談できませんでした」

助けを求めるという発想すら、浮かばなかったといいます。「助けてもらえる、というイメージが持てなかった。成功体験がなかったんです」。坂本さんは、福祉の道を志して精神保健福祉士になり、いまは「こどもびあ」の代表として、自らの経験を語り続けています。「精神障害のある親に育てられた子ども」として体験を語ったり、情報を発信するYouTubeでのラジオ配信を仲間とともに楽しむ日々、「気軽に話せる居場所があることが、本当にありがたい」と話します。

大人ができるのは、 たくさんの「糸」を垂らすこと

ゆかりさんが施設に戻る前、勇気を出して児童相談所にSOSのメールを送ったことがありました。アクションを起こしたにもかかわらず何も変わらなかったという経験談に、坂本さんは「子どものSOSは、数少ないチャンス。それを取り逃さずに受けとめるのが、大人の責任です」。「蜘蛛の糸」の話を例に、「大人ができるのは、選択肢という糸をどれだけたくさん垂らしておけるか。それを掴むのは子ども本人の力で、ゆかりさんにはその糸を掴む力があつたのだと思います」と続けました。

ゆかりさんも「信頼できる大人が、どれだけ声をかけてくれるか。私は人に恵まれたという自信があるから、行動できるのだと思います」。自分の経験を語り、ぴあ応援団で活動していること自体が、同じ境遇の子どもたちにとっての一本の糸で、希望になっていると坂本さんは指摘しました。二人は「地域こどもつなぐ応援金」が、いくつもの糸を紡ぐ可能性があるといいます。

10万円は、つながり続けるための 「きっかけ」

「地域こどもつなぐ応援金」は、児童養護施設を出て家庭に戻った子どもや、施設にもたどりつけないまま地域で困難を抱える高校生に、年10万円（卒業時には別途2万円の祝金も追加）を届ける取り組みです。成績による審査はなく、支援機関の推薦があれば受けられます。2025年度後期に始まり、初回は136人へ計738万円

が届けられました。

ただし、主役はお金そのものではありません。支援機関の人と、子どもと、家族が、定期的に会い、つながり続けるための「きっかけ」として使ってほしい——そんな願いが込められています。

「中高生にとって10万円は大きい。でもそれ以上に、つながりや成功体験を生むためのお金なんだ、と伝わってきました」と坂本さん。ゆかりさんも「お金があること自体が自信になって、弟や妹も一緒に守れるように動く原動力になったかもしれません。選択肢が増えれば、前を向けるんです」。お金がもらえて、人とのつながりもできる。人とのつながりが、自分の将来を前向きに考えるきっかけになる。二人の話は重なっていきました。

価値観は変わる 無理に大人にならなくていい

いま孤立している子どもたちに伝えたいことを聞かれ、ゆかりさんは「子どもは、大人に守られて当たり前なんです。もつと広い世界があると知ってほしい」と強調しました。「中高生の頃は視野が狭くて、その世界が全てだと思ってしまう。でも、年を重ねていろんな人と出会えば、価値観は変わります。無理に大人にならなくていい」

親が悪いわけではないと訴える坂本さんは「親御さんも大変な中で頑張っている。だから、親にも救いの手が届く社会になってほしいんです」と前置きし、子どもたちには「つらいときは、周りの明かりに気づけないこともある。それでも、数打てば当たるくらいの気持ちで、少しでも自分の気持ちを話せる人がいたら、そのチャンスに手を伸ばしてみてください」。心からのメッセージをおくりました。

暗い部屋で立ちすくむ子どもが、いつか自分の手でドアを叩けるように。その先に明るい場所と、迎えてくれる人がいるように。皆さまのご寄付が、新しい一本の「糸」になります。

「寄付でできた奨学金がなければ、いまの人生はありませんでした（ゆかりさん）」「寄付に込められた思いは、当事者にちゃんと届いています（坂本さん）」。「一人でも多くの子どもに自分の人生に向き合うチャンスを届けられるように、これからも引き続きご支援いただければ幸いです」。

応援が、子どもたちの 自信とやる気に



第1部

若者たちの「自立」と自己決定を育む伴走



自立援助ホーム わだちの家・川口充紀施設長に聞く

家庭の事情などで居場所を失い、自立を目指す若者たちが暮らす「自立援助ホーム」。身近な大人からの十分な支援がない環境で10代後半を迎えた、子ども・若者を支える、川口充紀さん（自立援助ホーム「わだちの家」施設長、全国自立援助ホーム協議会副会長）に、ホームでの実践的な伴走の様子を伺いました。



——「わだちの家」にやってくる子どもたちの現状について教えてください。

「わだちの家」では、開設以来のべ70名を超える若者たちを迎え入れてきました。近年は児童養護施設からではなく、一般家庭から直接ホームにやってくる子が増えています。また、以前は就労する子が主流でしたが、最近では全日制の高校に通う子が増加するなど、背景は多様化しています。

これまで「自分専用の学習机」に向かった経験がなかったり、家の中に安心して寝転がるスペースさえなかったりという環境で育ってきた子どもも少なくありません。心身ともに極限まで消耗してホームにたどり着いた彼らにとって、ここはまず「安心して息ができる場所」でなければならないと考えています。その安心の土台があって初めて、彼らの自立に向けた一歩が始まります。



——朝日新聞厚生文化事業団では、若者たちの高校での学びを支える「未来まなび応援金」を実施しています。

自立支援を取り巻く公的な金銭支援は少しずつ充実してきました。しかし、公的資金はその使い道が厳密に規定されているため、制度の「隙間」に落ちてしまうニーズがたくさんあります。

例えば「面接等に行くための交通費」や「履歴書の写真代」といった、大人から見れば小さく、しかしお金のない子どもたちにとっては切実なハードルをカバーしきれないのが現実です。こうした制度の隙間を埋め、金銭的な不安から一歩を踏み出せずにいる子どもたちの「挑戦」を後押しすること。それこそが、皆さまから託された「未来まなび応援金」の大きな役割です。

——川口さんは、応援金を「渡しておしまい」にしないための工夫をされているそうですね。

はい。私たちは、お金を「どう使うか」を子ども自身が真剣に考え、大人に相談するプロセスを何より大切にしています。

例えば、「お金をください」と言われて手渡すだけでは、子どもたちのためになりません。社会に出て本当に必要となるのは、「自分の思いを相手に伝える力」であり、「助けを求めれば大人は応じてくれるのだという信頼感」です。

申請書を形式的に埋めるのではなく、苦労しながら自分の頭で考え、周りの大人に相談してアイデアを形にする。このキャッチボールの積み重ねこそが、子どもたちの「自己決定」の力を育み、主体的な人生を歩むための意思をつくっていきます。

——ホームを巣立っていく子どもたちへ、どのような未来を願っていますか。

「わだちの家」では夜7時にみんなで食卓を囲んでご飯を食べる時間を何より大切にしています。

巣立ちの際、ホームの支援者とケンカ別れをしてしまっは、その後気軽に頼ることはできません。「お金がないときは、とりあえずホームに夕飯を食べに行こう」と、困ったときにいつでも帰ってこられる関係を築いて送り出すこと。それが、彼らが社会とのつながりを維持するためのセーフティネットになります。

関わった子どもたちが5年後、10年後に、それぞれの場所で「素敵な大人ライフ」を送っていてほしい。そのために、私たちは今できるベストの伴走を続けていきます。



定期的に行っている「こども会議」の様子。調理体験、乗馬体験、室内ゲーム大会、スポーツ大会など様々なイベントを入居者自身で計画し、実行に移します。

第2部

全国の現場から届いた

「応援金をもたらした子ども・若者の変化」



「未来まなび応援金」は、自立援助ホームや子どもシェルターで暮らし、未来にむかって高校でのまなびに挑戦する全国の若者たちに、年間で最大6万円を届けています。各地の現場から寄せられた、子どもたちの心や行動の具体的な変化をご紹介します。

Case 1：諦めを「やってみよう」に変える

これまで、自分のアルバイト代やなけなしの貯金を切り崩して検定料や参考書代を支払ってきた子どもたちにとって、「お金がないから諦める」ことは当たり前の日常でした。

しかし、この応援金によって金銭的な不安が和らぎ、「諦める前に、まずは挑戦してみよう」という主体的な行動が生まれています。「何に使うことが自分にとって有意義か」を計画的に考え、使い道を職員とじっくり相談する時間そのものが、大きな成長の機会となっています。

Case 2：自分で選んだスーツが、一步を踏み出す自信に

いただいた応援金で、就職活動用のスーツを購入した子がいます。それまで彼は「自分なんて……」と気後れし、成人式への出席を迷っていました。

しかし、自分にぴったり合う新品のスーツを手にしたことをきっかけに「成人式に行ってみよう」と決意。さらに、本来の目的であるアルバイトの面接や就職活動にも、格段に前向きに取り組むようになりました。公共交通機関を使ってお店へ行き、自分でスーツを選ぶこと自体が新鮮な社会経験となり、その道中、同行した職員と将来についてゆっくり語り合う有意義な時間も生まれました。一着のスーツが、彼の世界を広げる扉となりました。

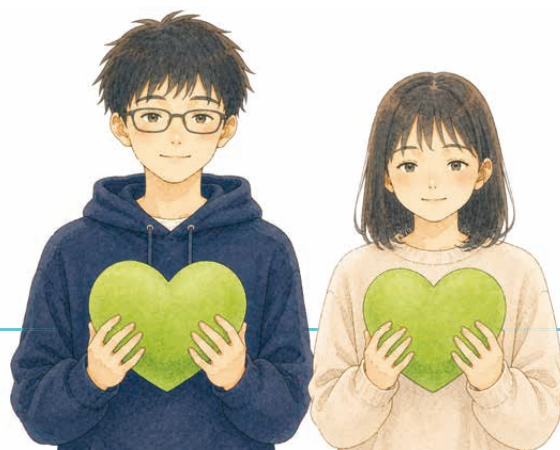
Case 3：「なぜ私を応援してくれるの？」

祝福や支援を受ける経験が乏しかった子どもたちは、応援金の案内を受け取った際、最初は「どうして私を支援してくれるの?」「本当に受け取っていいの?」と驚いた様子でした。

しかし、その驚きは徐々に「自分を応援してくれる見知らぬ大人が、この社会にいるんだ」という安心感へと変わっていきました。これまでは日々の生活を維持することに精一杯で、自分の「学び」や「挑戦」は後回しにされてきましたが、この応援金が「未来への投資」を後押ししています。

ホームで生活する中で、子どもたちが将来への不安や孤独感に押しつぶされそうになることは少なくありません。また、これまでの経験から、ひとつのことを継続して頑張ることが難しいケースもあります。

だからこそ、「見知らぬ誰かが自分を応援してくれている」という実感は、単なる金銭的援助の枠を超えた、彼らがこの社会で生きていくための「安心感」と「心の支え」になっています。



困難が「強み」に変わるまで ～仲間とだからできること～

社会的養護を経験した若者4人が、「ぴあ応援団」での仲間との出会いを通じて、孤独や葛藤を乗り越え、自らの過去を「強み」に変えるまでの歩みを振り返ります。



※「ぴあ」という名称には、社会的養護経験者が、全国の仲間とともに未来の子どもたちの力になる、というメッセージが込められています。

【参加者紹介】※名前は仮名。

ゆり：社会人4年目。9歳から18歳まで里親家庭で育つ。

こうた：社会人2年目。11歳から18歳まで児童養護施設で育つ。

あきな：大学4年生。14歳から18歳まで里親家庭で育つ。

まもる：社会人5年目。2歳から22歳まで児童養護施設で育つ。

旅行できたことが本当に嬉しかった

児童養護施設や里親家庭で暮らして、心に残っていることは何ですか？

あきな：嬉しかったのは里親さんと旅行したことです。実父と暮らしていた頃は家族で旅行に行くことがなかったので旅行先で遊んだ思い出は、今でも写真を見返すほど大切です。一方で、「実父が襲ってくるかもしれない」という恐怖が常にありました。でも、毎日何事もなくご飯を食べて学校へ行くという恐怖のない「日常生活」を繰り返すうちに、ここは安全なんだと思うことができました。

ゆり：今の話、すごく共感します。私も母子家庭で旅行に行けなかったのが、里親家庭で旅行に行けるようになったときは本当に嬉しかったのを今でも忘れません。

こうた：僕は大学進学を決めたとき、施設に前例がなくて不安だったのですが、職員さんが金銭面のやりくりや面接練習に親身になってくれたのが嬉しかったです。一方で、当時はスマホが持てなかったり門限があったりと、周囲との「格差」を感じて苦しい時期もありました。

まもる：僕は施設で暮らしていたため門限がありましたが、当時は友人に打ち明けることができず、嘘をついて帰るのがしんどかったです。結局、その悩みを解決できないまま退所しました。今振り返ると「打ち明けた方が楽だったかもしれない」と思う一方で、「打ち明けないことも、大切な関係を守る一つの方法だった」とも感じています。

反対に嬉しかったのは、地域の児童養護施設が集まるスポーツ大会が毎年あったことです。野球、フットサル、バレーボール、キックベースと、体を動かすことが大好きだった僕はすべての種目に参加し、いくつかで優勝することもできました。その時の成功体験が、今の体育教師という職業に確実に結びついていると思っています。

「こんなにたくさん同じ境遇の人がいたんだ!」

「ぴあ応援団」として活動している仲間と初めて会ったときの印象は？また、ぴあ応援団は皆さんにとってどのような存在ですか？

あきな：初めて仲間と会ったときは「こんなにたくさん同じ境遇の人がいたんだ!」と驚きました。みんなポジティブで活動的で、私もあんなふうになりたいと圧倒されました。ぴあ応援団は私にとってスイッチを入れて「頑張る自分を引き出せる場所」です。

こうた：僕も、様々な分野で前向きに頑張っている仲間の姿を見て、驚いたのと同時にパワーをもらいました。僕にとってのぴあ応援団は「いつでも戻りたいと思える場所」です。

まもる：何も言わずとも互いを理解できたこと、気を遣わなくていい関係が心地よく、事務局の方からお誘いをもらったときは二つ返事で了承しました。ぴあ応援団は僕にとって、「後ろめたい自分の経験」を生かすこと

のできる存在です。当時の僕と同じ境遇の子どもたちが、施設にいて良かったこともあると、将来気付くことのできるきっかけになりたいという思いで活動をしています。

ゆり：自分の気持ちや希望などを誰の目も気にせず伝えられる仲間に出会えて嬉しかったのを覚えています。「心のよりどころ」や「居場所」であり、一人ではできないような「やりたいことが実現できる場所」です。

自分の過去を伝える勇気を持てた

活動を通して、自分自身にどのような変化がありましたか？

あきな：私は極度の緊張しいで、最初は人前で話すなんて絶対に無理だと思っていました。ですが、仲間のサポートを受けながら思い切ってセミナー登壇に挑戦したところ、「やってみたら、できた!」という経験が大きな自信になったんです。そのおかげで今では、「とりあえずやってみよう。ダメならまた助け合えばいい」と、何事もポジティブに捉えられるようになりました。

まもる：僕は活動を通じて、社会的養護経験者ではない人に自分の過去を伝える勇気を持てました。「その環境で夢を叶えたのはすごいね」と言ってもらえたとき、初めて自分を肯定できたんです。しんどい過去も、今の自分が幸せならそれでいいんだなと思えるようになりました。

こうた：僕にとって、中高生の後輩たちに経験を伝えるために頭の中を整理するプロセスそのものが、「あの過去があったから今の自分がいるんだ」と、これまでの歩みを受け入れる大きな力になりました。

いつか直接お礼を伝えたい

活動を支えてくださる寄付者の皆さまへ、メッセージをお願いします。

あきな：私が大学で大好きな古典文学を心ゆくまで学べているのは、奨学金のおかげで経済的な不安がなかったからです。正直、学校へ行くのが少し億劫になってしまう朝もあります。でもそんなとき、「私の背中を押して、応援してくれる人がいるのだから頑張ろう!」と、あたたかいパワーをもらっています。活動を支えてくださる皆さまの優しさに、心から感謝しています。

こうた：顔も知らない僕たちを、信じて応援して下さる方がいる。それって、本当にすごいことだと思うんです。いただいた優しさをしっかりと受け止め、いつか僕も、自分が得意なデザインなどのスキルを使って、誰かに何かを「分け与える側」になりたい。その日に向けて、これからも一歩ずつ努力を続けていきます。

まもる：皆さまのご支援のおかげで、私たちは多くの活動に挑戦することができています。かつての僕自身がそうであったように、社会的養護のなかで暮らす子どもたちが一人でも多く報われ、未来に希望を持てるように――。これからも誠心誠意、この活動に全力を尽くしていきます。

ゆり：私の夢である「社会的養護を経験した子だけでなく、全ての子ども・若者が自分らしく輝ける社会の実現」を目指して、これからも活動を続けていきます。いつか直接お礼をお伝えできる日を夢見ています。



ご寄付のお願い

「だれもが支え合い、和やかに暮らせる社会を実現する」ことをミッションとして、皆さまの「なんとかしたい」という思いを、具体的な行動に変えて、困難な立場の方々に届ける活動をしています。これからも引き続きご協力をお願いいたします。

ご寄付の使いみち


困難な状況にある子どもたちの進学や
学びを支援する奨学金「応援金」を届けます


被災された方への
緊急支援として役立てます


さまざまな「当事者のつどい」で
つながりをつくります

クレジットカード

事業団ホームページから
ご寄付の手続きができます。



ご寄付の 方法



銀行振り込み

お振り込み前に、こちらから
ご寄付の登録をお願いします。



リサイクル募金「きしゃぽん」

お家でご不要になった品物をお送りいただくだけで寄付になります。嵯峨野株式会社が査定・換金し、事業団の活動資金に充てられます。

お送りいただけるもの

 書籍 (ISBNコード付)  DVD・CD・ゲームソフト  ブランド品  貴金属  切手・ハガキ
 骨董品・絵画  時計など

集荷・査定換金・募金送金は「きしゃぽん」(運営: 嵯峨野株式会社) が実施。

集荷申し込み、取扱品に関する問い合わせは、電話0120-29-7000(9:00-18:00)まで。

ホームページ kishapon.com/asahi-welfare/

インターネットからもお申し込みいただけます! (右のQRコードからお申し込みください)



未来へ届ける遺贈寄付・相続財産寄付

近年、とくに相続財産寄付のご相談を受けることが増えてきています。遺贈、相続財産寄付ともに、いくらからでもお受けしています。ご相談や資料請求など、お気軽にお問い合わせください。

無料相談(初回60分)をご利用いただけます

司法書士の村山さんと、遺贈相談について提携を結んでいます。

遺贈について専門家に相談したい方は、ぜひご利用ください。

※遺贈先候補として、当事業団をご検討いただいている方に限らせていただきます。

※ご相談にともない、ご寄付をお願いすることはありません。

※当事業団への遺贈、および相続財産からのご寄付は、所定の手続きにより相続税の非課税措置を受けることが可能です。



村山澄江さん プロフィール

司法書士、認知症サポーター、承継寄付診断士。
1979年名古屋生まれ。早稲田大学卒業。2010年
司法書士村山澄江事務所設立。著書に「今日から成
年後見人になりました(自由国民社)」など。生前
対策の対応実績1500件以上。

遺贈の資料請求、無料相談のお申し込みはこちら

TEL 0120-600-668

HP

朝日新聞厚生文化事業団

検索

お問い合わせ
フォーム



朝日の社会福祉 2026

2026年8月発行

発行者: 社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団

住所: 東京都中央区築地5-3-2

デザイン: かえるぐみ

このダイレクトメールは、過去にご寄付をくださった方などへお送りしています。送付停止や住所変更、同一ご住所で1通のご案内をご希望の方は、お手数ですが下記専用ダイヤルへご連絡ください。ホームページの専用フォーム(右のQRコード参照)からもお手続きいただけます。

TEL 0120-600-668

